



泡瀬の塩田跡地と思われる干潟地域

元来、泡瀬には入浜式塩田を造成するのに適した広い干潟があった。それに目を付けた人たちが、二百余年前の昔から塩づくりを始め、それが長く子孫に引き継がれてきた。この塩づくりを通じて戦前の泡瀬の繁栄があった（泡瀬誌、昭和 63 年より引用）。

今では残念ながら塩づくりは見られないが、広大な干潟の端の方（泡瀬通信施設前）には大きな石が直線状に置かれている。おそらく、ここで大規模な塩田があったと思われる。この入浜式塩田は、満潮時の海面より低い所に堤防を築いて土地を囲み、内部の広い砂地を平らにして造った。

沖縄での塩の主な生産地は、那覇、泡瀬、豊見城、羽地、具志川の 5 地域であった。明治 36 年の泡瀬の塩田面積は、31 町 2 反であったが、戦後の昭和 35 年(1960)には 18 町 6 反となった。その後、泡瀬の塩田は、復帰後、完全に埋めたてられ、住宅地となったといわれている。